

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 国立国語研究所における情報資料関係部署の歩み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江川, 清 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002932">https://doi.org/10.15084/00002932</a>

# 国立国語研究所における情報資料関係部署の歩み

江川 清（情報資料研究部長）

## 1. 現在の情報資料研究部

ご案内のように、国立国語研究所は来年度から「独立法人・国立国語研究所」として新しいスタートを切ることとなっている。同時に現在の研究部体制から部門制への移行も予定されている。

情報資料研究部は平成元年4月に発足した。今年は、部誕生から12年目、干支が一巡しようという時期である。来年4月から、当研究部も、これまでの研究業務に加えて、新しい事業を展開することとなっている。

現在の情報資料研究部は、第一研究室、第二研究室、同分室、電子計算機システム開発研究室で構成されている。（これに図書館システムとその運営業務が含まれている。）

今回の研究発表会では、各部署で行っている主たる研究業務の内容を紹介するとともに、これから展開する予定の新構想の一端を披露し、ご参集の方々からのご批判・ご助言をいただきたいと考えている。

## 2. 本日の報告概要

プログラムの順番に、各報告の趣旨・位置付けについてごく簡単に述べておく。

### 2.1. 熊谷康雄「バーチャル日本語情報資料館構築に向けて」

表題からも推察できるように、今後の国立国語研究所の情報システムの中核として構想しているもののうちの「バーチャル」つまり「電子的」資料館の実現とその意義について論じるものである。これは、「電子図書館」および日本語教育センターが展開しようとしている「日本語教育支援ネットワーク」等を包み込む、総合的な情報システムである。報告では、電子化の方面に主眼が置かれるが、実際は、書籍・調査票といった紙メディア、録音・録画資料など多メディアを統合化するものである。

### 2.2. 斎藤達哉・新野直哉・伊藤雅光「国語年鑑データベース活用の一事例—1991～1999年の国語研究の動向」

『国語年鑑』（1954年創刊）は、主として国語・日本語に関する研究文献情報を収集・収録したものである。これは、先行研究の掌握・関連研究の探索などが容易になる、ということで学界から高く評価されている。本日の報告は、題名と副題からも分かるように、『国語年鑑』掲載情報そのものを資料として時系列的分析を行い、それを通して日本語研究の動向を探ろうとする意欲的な報告である。

### 2.3. 池田理恵子「新聞切抜きデータベースの作成とその活用例」

「新聞の切り抜き」は、昭和24年3月1日付けのものから始まり、今日も継続している。

（データベース化は情報資料研究部が発足した平成元年4月から開始。）この切りぬきから得られる情報は、その時々々の諸層における言語意識の反映であり、言語生活史（言語観の動き）を探る際の有力資料となる。なお、「新聞の切抜き」とその整理自体は、さしたる

問題はないようにみえる。しかし、報告で触れられるかと思うが、データベースとして展開し、それを公開するときには、いろいろ難しい問題が山積している。

#### 2.4. 横山詔一「言語研究資料としての電子媒体の問題点」

この報告は、前の3人のものとは多少異なる印象を与えるかも知れない。近年、電子メディアでの作品や資料が急増している。これに伴い、電子メディアを直接の資料とする研究が増えている。入力の手間が省け、大量の資料を容易に扱いうるという利点がある。しかし、この新しいメディアがもつ問題も少なくない。本報告は、具体的な例を提示しつつ、問題点を明らかにするものである。

#### 2.5. 関連研究室公開

上記の4つの報告を中心に、現在情報資料研究部で実施している業務を具体的な形で見ていただくために実施するものであり。詳細は別途配布する資料を参照されたい。

### 3. 創設期における情報資料の取り組み

国立国語研究所は、今から52年前の本日、つまり昭和23年12月20日に創立された。実質的な業務を開始したのが翌24年で、その年の6月に「資料室」が設置されている。『国立国語研究所年報1』によると、資料室の主業務として次の4項が記載されている。

- (1) 資料・図書の整備およびその管理
- (2) 国語関係文献目録の作成
- (3) 国語関係の研究機関・研究者の調査と連絡
- (4) 所外の人々の研究利用に関する業務

資料室は、翌25年には、研究第1部から独立し、人員も前年の3名から9名へと大幅に増員され、これに伴い業務範囲も次項が追加されるなど拡大している。

- (5) 国語の歴史的発達に関する基礎的作業
- (6) 辞典の編集方法に関する調査研究
- (7) 研究所全体の成果を刊行するための編集業務

さらに、その次の年（昭和26年）には、さらに次ぎの2項が付加されている。

- (8) 国語関係術語の検討
- (9) 特殊問題の調査研究

以上のことから、国立国語研究所では創設当初の資料室の役割は非常に大きなものであったことが読み取れる——研究所という組織としては、この種の情報資料を重視するのは当然のことではあるが。

その後、上記諸課題の一部の他部署への移管等による業務の縮小や、資料室に対する認識の変化など、いろいろな紆余曲折を経て、今日の情報資料研究部に繋がっている。また、これに呼応する形で、主たる部署の名称も「資料室」（昭和24年）→「資料調査室」（昭和30年）→「資料研究室」（昭和33年）→「文献調査室」（昭和46年）→「情報資料研究部」（平成1年）と変化してきている（図書室は昭和33年設置、昭和40年から図書館に改称。）

国立国語研究所での情報資料の取り扱いは、時代の趨勢によって内容や方法は異なっているが、一貫してそれらを大事にしてきたということは、この部署の将来構想を考える上で十分認識しておく必要があるだろう。